

主義の丹念さで描かれているが、ここマルワゴーンでは感傷もなければ、阿鼻叫喚も聞こえず、黙々と処理されている。その命の軽さが、いささかもの悲しい。

参考 斎藤茂吉『^{しやうこう}赤光』(大正2年)所収「地獄極楽図」(明治39年作)より録2首

^{じやうはり}浄玻璃にあらはれにけり 脇差を差して 女を いぢめるところ

にんげんは^{うしうま}牛馬となり岩負ひて ^{ごずめず}牛頭馬頭どもの追ひ行くところ

一首目、「^{じやうはり}浄玻璃」とは、地獄の^{えんま}閻魔王庁で^{もうじや}亡者の生前における善悪の所業を映し出すという鏡のことだが、ここでは「覗きからくり」のレンズをさし、その奥に「地獄極楽図」が「あらはれにけり」という趣向だろう。「ガラス玉」などと言わず、いかめしいサンسكريットの漢音訳を用いることで、祭の夜の幻想的な雰囲気を表している。台をたたいて拍子を取りながら、しわがれ声でうなる説経節によって語られる、おどろおどろしい世界。「いぢめる」のねっちょりしたひびきが、茂吉初期の情念的な歌風を代表し、読みながらその所作をまねてみたくなる。

二首目、「負い」「追い」の同音異義語をならべて、人畜間の差別をとりはらったうえで、ひらがな書きで「にんげん」の尊厳をうばいとり、画数の多い「^{ごずめず}牛頭馬頭」の恐ろしさを強調している。人間と畜生の地位が逆転する、倒錯のイメージ。

(了)